
1月6日生まれ【東のエデン】

神狩アイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1月6日生まれ【東のエデン】

【コード】

N8916I

【作者名】

神狩アイ

【あらすじ】

「東のエデン」二次創作です。

(前書き)

「東のエデン」二次創作です。
本編とは時系列が盛大にズレてます。

相変わらず、よく分からない構造だ。

決して正確無比に縦々横々ではならないとでも憲法で定められているのか、エスカレーターがまず確実にフロア内の店舗が見わたせるようにぐるりとまわりこんで設計されているあたり、資本主義社会って……と咲を落胆させるに十分だった。本来の意味を失った爆心地付近の豊洲のショッピングモールを、勝手知ったる己の敷地とばかりに彼女はずんたか横切り、止まったエスカレーターをずんどこ大股でのぼっていった。

このショッピングモールの最上階、フロア全域を占める大きなシネコンのVIPルームには、滝沢がいる。この大きなモールを買い取ってしまった、住みついている男。ホワイトハウス前に全裸で立っていて、それこそ「やせいのたきざわがあらわれた！」といったノリで、けれど素なのか見栄っ張りなのか分からないデタラメな生命力と決断力をかかえるほどもって自力で日本まで帰ってきた、記憶喪失の青年。

彼を追いかけて早幾日の昨日、咲は大学の講義中に届いた彼からのメールを、それこそパブロフの期待を裏切ることなく滝沢指定の着メロと同時にひらいた。好きな相手からのメールに喜々として飛びつくなんて、初めて恋をした中学生みたいで恥ずかしい。

メールは明日、つまり今日のいつでも豊洲のシネコンに来いという、ただそれだけの簡潔な内容。

最後のエスカレーターをあがり、数ヶ月前に上映していた映画のポスターがそのまま壁にはりこまれてある通路を抜ける。咲は電気が消えてしまっている天井を見上げ、最初にここでレイトショーを見に来たときのことを思い出した。リクエストにすぐ応じてくれた滝沢。彼は結局、映写室の窓から顔をのぞかせたのを最後にいなくなってしまう、二日後まで連絡がとれなかった。

彼がそのとき何をしていたのか、咲には分からない。けれど、かの日はともかく現在を中心にして、比較対象として過去をもちだしさえすれば間違いなく彼を信頼している自分がいるし、詮索するのも失礼だろうと黙っている。

バーには空き瓶ひとつころがっていなくて、物音もしない。静寂。

咲は滝沢が「大杉を探してくる」と言つてここを出て行つた日を思い起こし、唇を噛みしめ、しかしわずかに力づよく、VIPルームへの階段をのぼっていった。

「滝沢くん？」

部屋のドアをあけると、あるうことかそこは照明が完全に落とされて薄暗かった。壁に手をはわせてライトのスイッチを入れる。部屋が明るくなったはいいが、どこにも滝沢の姿はない。

「滝沢くん、私よ。どこにいるの？」

呼べども呼べども待ち人來ず。ソファも、壁に飾られた年代物のワインも、豆柴用の給餌機も、ただ文句のひとつも言わず静かにたたずんでいた。ガラス張りの外には港に停泊している船がかすかな電球を点滅させていて、水面がその光に揺れて美しい。陽がしずんでももないからか、そのガラスに咲が半透明になってうつりこむ。

咲はその場に茫然と立ち尽くし、ぽかんと口、ひらきっぱなしで閉まつてくれない。せっかく滝沢に会えるかと思つて、髪をきれいに巻いてきたのに。メイクも丁寧にしたのに。かわいい服を着てきたというのに。なんてやつだ。

結局はこうして、最後には想いが伝わらない。

好きな気持ちだけがから回りして、膨張して、手のつけようがないほど大きくなってしまっていることに今気づいた。

「ばか」

ぼそりと言葉を吐きだす。たった二文字だけなのに、床に反響してスピーカーのようになかに軽やかにはねかえり、部屋中に霧散した。散りゆく時間。咲いてゆく空気。映画の中で展開される単純明快なストーリーが、ゆっくりと時間をかけてガラスのように割れて、咲

の耳の奥で放射状に飛び散ってゆく。

何も生まない。滝沢を追いかけているのだって、本当は自分だけなんだってことが分かってる、ってことが分かってる。

好きになってももらえるかどうかなんて分からないのに、それでも追いかけてしまうのはどうしてだろう。自分のことを恋愛対象として見られているかどうかも怪しいのに、嫌われることを恐れてまで、こんなにも滝沢を求めてしまうのは一体どうしてだろう。

目からこぼれそうになった涙を拭き取るうとしたとき。

「咲！」

後ろから声がして脊髄反射的に振りかえろうとするより早く、いきなり背後から大の男の体が突撃してきて、大きな腕で抱きしめられた。緑のミリタリージャケット。慣れてしまったこの匂い。

瞬間、わっと泣き出しそうになった。

「滝沢くん？」

顔を反回転させて後ろをみやると、予想通り、いつもの格好をした滝沢に抱きしめられているんだと理解した。彼は自分より頭ひとつぶん小さい咲の細い体を優しく拘束し、髪に頬を寄せている。

ほんの少し、彼が笑ったのを咲は雰囲気で察した。

「咲、誕生日おめでとう」

後頭部からやわらかな声が響く。好きになってしまったこの声。聞くだけでドキドキしてしまう、甘い声。

午前中のうちに友達の何人かに同じことを言われプレゼントをてんこ盛りもらったけれど、滝沢に言われたときが一番うれしい。いつもの調子を崩さないおちゃらけなこの人に言われると、誰よりもうれしい。そんな気がした。

ああ、やっぱりこの人だ。この人がいいんだ……。

その感覚で、先刻の疑問が吹き飛んだ。

とはいえ、二十二歳の大人の男に背後から抱きしめられている体制だ。なんとか平静を保たなければと思いつつも咲は顔をかっとう気させ、緊張のあまりまわらない呂律で反撃した。

「ちょ、なつ、滝沢くん、何してんの？」

「何って、ハッピーバースデー」滝沢は顔がうかがえなくても分かるほどあっけらかんと答える。「今日は一月六日でしょ。むしろ微妙に新年あけおめ」

「分かったわよ、お祝いしてくれてどーもありがと。でもこの体制がヤバいんだって！ 倫理的に！」

咲は必死で滝沢の腕を振りほどこうとするが、いかんせん体力差がありすぎてそう簡単にはかなわない。逆に滝沢の腕はさらに力強く咲を抱きしめるばかりで、だんだんと咲も抵抗するのがむなしくなつて、大人しく滝沢に拘束されるがままになつてしまう。

しばらくそうして互いに無言でいたが、やがて滝沢は咲のうなじに頬をよせ、耳元でささやいた。

「誕生日プレゼント、何が欲しい？ よっぼどのものじゃなかったら買ってあげるよ」

「よっぼどのものって」
滝沢は首を少しかしげた。「例えば、アメリカ大統領になりたいとか、世界征服とか、百億円以上かかるものは駄目かな」

「何それ？」
「気にしない気にしない」そうやって滝沢が咲の首元でけらけら笑うものだから、さすがに咲もびくりと背筋を震わせて紅潮してしまつた。

免疫のないなあ、私。落ち込むだけむなしくなるので途中でやめた。
滝沢が自分の胸すれすれのところ腕をまわしていてなんとか理性をとどめていることに逆にこちらが恥ずかしくなり、咲はおそろおそろ、自分の鎖骨にのつかった滝沢の右腕に手を伸ばし、袖を握つた。

背中に当たる広い胸も、上半身を優しく拘束している太い腕も、髪ごしに頭皮で感じられる頬も、すっかり覚えてしまったかすかな匂いも。

相手が滝沢だと分かっているから、好きになつてしまった今、すべ

てを感じていたかった。覚えていたかった。日の出槌頭でフェリーに乗って去ろうとしていた彼の手をつかんだのは、他でもない自分だから。

「ありがとう、滝沢くん」

それだけが、今の精一杯だった。

鳩が豆鉄砲、というより割り箸の輪ゴム鉄砲を食らったように一瞬だけ驚いてきよんとしていた滝沢だったが、すぐにいつものお調子者に戻って、「まだ何もしてねえのにお礼言われてもなあ」と笑った。

「しかし、俺、訴えられない？」

「なんで」

「これってどう見てもセクハラじゃん。お互いになんとか成人してるし」

抵抗した私をさらにきつく抱きしめたのはどこのどいつだ、と突っ込みたくなるのを必死で抑える。

「あー、まあ、もういいよ。誕生日だし、なんでもいいや。無礼講」

「ええっ、俺たち上下関係あつたっけ？」

いいのいいの、と笑って返してしまえば、滝沢は眉をひそめて首をひねり、わけが分からないといった顔で咲の頭に顎を寄せた。

「咲って、ときどきよく分かんねえんだよなあ。俺、紳士的に振るまってるつもりなんだけど、どっかマイナスポイントされることでもあつたのかな」

男として見られてないのかな、という小さなつぶやきは、残念ながら咲にも聞こえてしまっていた。

欲しいものはたったひとつだけど、まさか口に出せるわけがないから。

ためらいなく優しく抱きしめてくれて、名前を呼んでくれただけで十分うれしいから。

そんな淡い幻想を抱きながら、咲はふわりと笑って滝沢の手を握っ

た。

「顔を見せてよ、新年初めてなのに」
そう言うとうまく滝沢は咲を解放し、彼女の正面にまわった。いつもの軽い、ダンスのステップを踏むような調子で。

緑のミリタリージャケットに癖毛を揺らしながら、自分がホワイトハウスの前でうっかり野生の全裸男と遭遇したあの瞬間となんら変わらない、よく知っている滝沢朗がそこにいた。精悍で、整った顔立ち。何も崩れない、それ。

彼は子供のように満面の笑みを見せ、「誕生日おめでとう」と改めて祝辞を述べた。そして彼は少し腰をかがめて片足を前に出し、右手を腰に当てて、左手を咲の前に差し出した。

「プレゼントに欲しいものをなんなりと。王女様」

あ、お嬢様じゃないんだ。

そう思った瞬間、自分の思い込みはきつと間違いじゃなかったんだと苦笑し、彼の手をそつと握り返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8916i/>

1月6日生まれ【東のエデン】

2010年12月31日21時53分発行